

33

1890-91年の富士川游：
『普通衛生雑誌』と『報知新聞医事月報』の合併を中心に

月澤美代子

順天堂大学/M-医学史・科学史研究室

1. はじめに

富士川游が医史学関連の研究を始めたのは1890-91(明治23-24)年頃とされている。

『中外医事新報』誌が日本の医史学関連の論攷を掲載し始めるのは第284号(明治25年1月25日)掲載の「緒方洪庵伝」からであり、この年の第297号(8月10日)には呉秀三も「江戸幕府時代の医学」の連載を開始している。一方、中外医事新報社は1889(明治22)年に医療情報誌を新たに2誌、創刊した。『普通衛生雑誌』と『奨進医会雑誌』である。『奨進医会雑誌』に関しては、『日本医史学雑誌』の実質的な前身誌であることもあり、充実した先行研究が発表されている。しかし、『普通衛生雑誌』については、ほとんど知られていない。この発表では、『普通衛生雑誌』と『報知新聞医事月報』の合併に焦点をあてて明治20年代の医療情報誌の出版環境について検討していきたい。

2. 『普通衛生雑誌』の創刊

『普通衛生雑誌』は1889(明治22)年2月に創刊された。明治23年6月号までは、発行者兼印刷者・松田堅道、編輯者・大林一彦となっており、翌7月号から編輯者・富士川游、発行者・松田堅道と変更されている。住所は富士川も松田も、東京府日本橋区蠣壳町原田貞吉寄留となっており、発行所の普通衛生新聞社も同住所である。

『普通衛生雑誌』刊行の趣旨は次のように唱われている。「可及的平易の文章を用い衛生の学理と実験とに關することを一般公衆の耳目に達せしめんとする」。すなわち、『中外医事新報』が読者層としてのターゲットの中心を「都鄙の開業臨床医」に置き、我邦の医学と衛生学を「完全無欠の域に発展」させることを目的として唱っていたのに対し、『普通衛生雑誌』は「一般公衆」向けに医療情報を「伝達・普及」させることを唱っている。

3. 『報知新聞医事月報』の創刊と販売戦略

『報知新聞医事月報』は、1891(明治24)年5月に郵便報知新聞社によって創刊された。毎月1回、第2水曜日の刊行であり、新聞紙面の半分の大きさの両面刷り4枚を2つ折りで綴じた全16ページの構成で、このうち、広告ページが5ページを占めている。創刊号には、緒方正規の「血液の「バクテリア」を撲殺せる物質に就て」という【論説】や、「コッホ氏新治療薬につきベルツ氏の意見」といった「ツベルクリン」関連の記事が掲載されている。『報知新聞医事月報』は、医療情報誌市場への参入にあたって、独自の販売戦略を立てた。例えば、『郵便報知新聞』購読者への無料配布と、全国の医師に向けての『郵便報知新聞』とのセットでの無償配布である。

4. 『普通衛生雑誌』と『報知新聞医事月報』の合併

1891(明治24)年10月10日刊行の『中外医事新報』(No.277)には、『普通衛生雑誌』が『報知新聞医事月報』に合併されるという広告記事が掲載された。両誌の記事を一度に読むことができ、読者には頗る好都合のはずとしている。しかし、現在、日本国内の閲覧可能な図書館において、11月以降の『報知新聞医事月報』の保存は確認されておらず、短命のうちに終刊したと思われる。『普通衛生雑誌』と『報知新聞医事月報』は、いわば、経営面では失敗した医療情報誌だったが、この合併を通して明治20年代の医療ジャーナリストたちの模索の過程を窺い知ることができる。